

モースとピーボディ・エセックス博物館の成立

小林 淳 一*

1 港町セーラムとピーボディ・エセックス博物館

モースコレクションを所蔵するピーボディ・エセックス博物館の話は、まず同館が位置するセーラムという古い港町のことからはじめることとしたい。ニューヨークの北東約300キロメートルのところに大都市ボストンがある。そこからさらに鉄道で北へ30分。セーラムは現人口が約4万人の都市だ。そもそもはイギリスからメイフラワー号に乗ってプリマスに上陸した清教徒たちが1626年に入植してつくった町である。入植者たちは、漁撈を中心に交易で生計を立てていたが、豊富な漁場からタラの干物の生産販売によって安定した経済を保てるようになった。やがて市場は拡大され、後背の無尽蔵といわれるほどの森林資源を活用することで、造船業と海運業によって大いに発展することとなった。

とくに18世紀はセーラムの黄金時代といわれるほど、遠くインド洋をへてアジアへと新たな航路を開拓し、アメリカの東方貿易における先陣を切るにおよんだ。この町のチェストナット通りには、往時の船長や商人たちが築いた豪邸が立ち並び、いまは栄華をしのぶ歴史的建造物となっている。



ガードナー・ピングリー・ハウス 全景 (左上)・食堂 (右上)・台所 (左下)・寝室 (右下)
ピーボディ・エセックス博物館所蔵 PEM Collection, 19269・19566・19527・19574

*東京都江戸東京博物館副館長

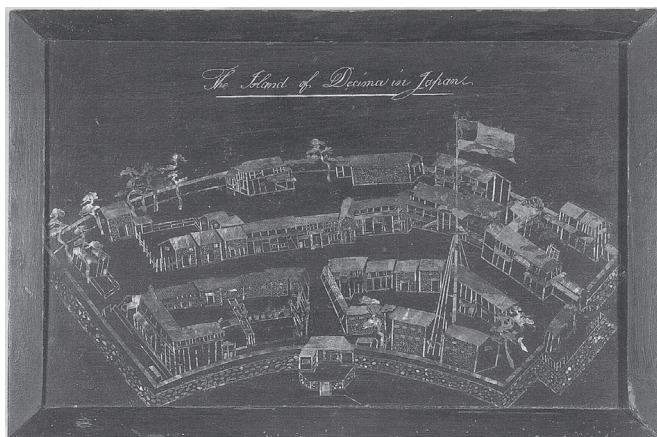
こうして繁栄してきたセーラムだが、大型化する船舶では遠浅のセーラム湾に接岸できなくなるにつれ、やがてその座はボストン、ニューヨークへとうばわれていった。モースのセーラム時代は、黄金時代が去って1世紀以上あとのことになる。

さて、いまからおよそ230年前、1789年に起こったフランス革命は、当時のヨーロッパの政治と経済に大きな混乱をあたえ、それは世界の貿易システムをも変えることになった。フランス革命に巻き込まれたオランダはフランスに侵攻され、1799年には世界の貿易上の利権を独占していたオランダ東インド会社も機能を失った。そして、オランダはフランス帝国によって併合され、それまでもっていたオランダの植民地や海運は新たな海の覇者となった大英帝国の脅威にさらされ、すべてイギリスに奪われていった。

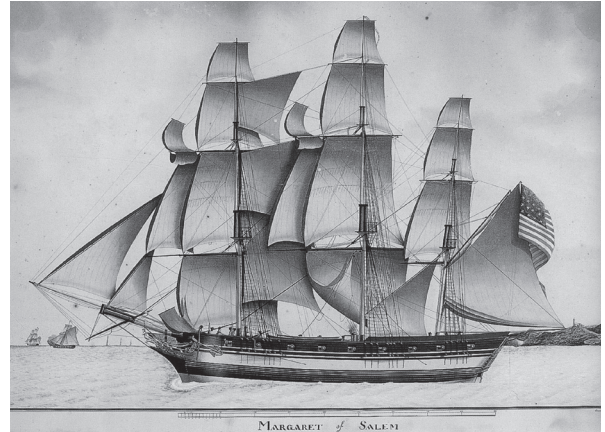
ただし、例外があった。アフリカ黄金海岸、広東、それに長崎出島だ。そこでは、世界史上ではすでになくなった国、オランダの国旗が厳然とひるがえっていたのである。日本に唯一、世界情報をもたらすオランダ自身がそのことを隠していたため、幕府はオランダ失国を知らなかったといわれる。東洋の水域をイギリス艦船や私掠船に侵されることをおそれたオランダは、1641年以来、長崎でおこなっていた対日貿易の独占をそれ以後も継続したいと望んでいた。そのため、中立国の船を雇うことによって、オランダ東インド会社のアジア基地であったバタビア（現・ジャカルタ）から長崎へ、年1回の航海の維持を企図したのである¹。

1797年から1807年の間、この「中立国傭船期」にはデンマークやドイツの船もあったが、ほとんどはアメリカであった。傭船料はおもに香辛料、コーヒー、砂糖、その他で、バタビアでオランダ東インド会社へ積み荷を引き渡して傭船を果たしたのち、さらに日本の工芸品をはじめ、アメリカに向けた物資を積み本国へと持ち帰った²。

アメリカ船は、1786年からバタビアに航海しており、そのうちセーラム港から出航したものだけでも1807年までに35隻あった。なかでも1799年に長崎出島に寄港したジェームズ・デブロー船長（フランクリン号）、および1801年のサミュエル・ダービー船長（マーガレット号）がセーラムにもたらした日本の文物は、現在でもピーボディ・エセックス博物館が保存するところとなっている。私たちはモースコレクションと区分するため、これらを「キャプテンコレクション」と呼んでいる。1853年、日米和親条約の締結のためにペリーが来航する半世紀ほど前には、すでにセーラムの船が長崎に寄港していたのである。なお、このキャプテンコレクションはモースコレクションと合わせて、1999年に江戸東京博物館



盆（出島図）
ピーボディ・エセックス博物館所蔵
PEM Collection, E6576



フランクリン号図 (左)・マーガレット号図 (右)
 ピーボディ・エセックス博物館所蔵 PEM Collection, M11925・M163

で開催された特別展「日米交流のあけぼの」³で200年ぶりに初めて里帰りした。

世界各地との海外貿易によって富を築いた船長たちをはじめ、海運関係者によって1799年、それは奇しくもフランクリン号が長崎に寄港した同年であるが、「セーラム東インド海運協会」が設立された。協会員である船乗りたちはセーラムから遠くアフリカ、ヨーロッパ、はては中国、インド、スマトラ、バタビア、マニラ、そして長崎などへ冒険の航海にいそしんでいた。

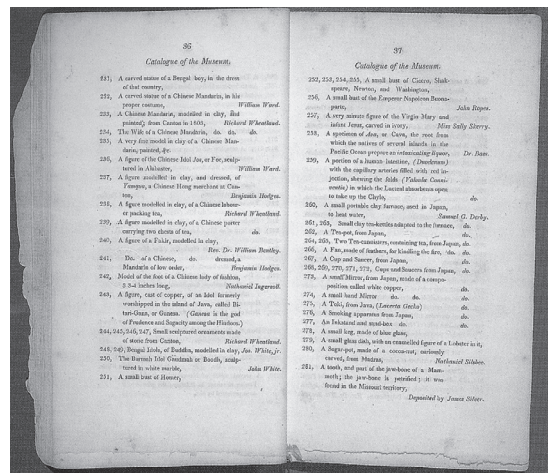
彼らは未知の国ぐにの土地、土地から持ち帰った「珍品奇物」を一堂に会して市民への展覧に供した。その会場はセーラム東インド海運協会2階のホールがあてられた。実は、この協会こそがピーボディ・エセックス博物館の前身なのである。

2 セーラム東インド海運協会

ピーボディ・エセックス博物館の成立は、セーラムという港町、そしてセーラム東インド海運協会と深いかわりをもつ。同協会の「設立趣旨」には、以下の点が挙げられている⁴ (以下、抄訳は筆者)。

セーラム東インド海運協会は、セーラム船籍の船舶をもって、実際に喜望峰またはホーン岬以遠の航海をしたことのある船長もしくは船荷監督によって構成される。協会は1799年に創立され、1801年に法人格を取得した。いままでに入会した196名のうち、49名が死去し、5名が協会を引退した。現在の会員は142名で、121名がなおセーラムに在住する。

以下、同協会の主たる目的は3つあった。



セーラム東インド海運協会カタログ
 ピーボディ・エセックス博物館所蔵
 PEM Collection

第1は、物故会員の妻や子に対して必要な援助をする。それには認可料や年間査定料から得た現在高7千ドルにのぼる協会基金の収入をあてる。

第2は、航海の安全と改善に資するような事実や記録を収集する。この目的の達成のために、航海に赴くすべての会員は協会から空欄の航海日誌を受け取る。航海中に生じた出来事のうち価値あると思ったことは、それにすべて記入しなければならない。帰港後は協会に寄託される。これらの日誌は監修者によって索引が付され、10冊ずつ1巻にまとめられる。すでに世界のさまざまな海域における67の航海日誌が寄託となっている。これらは公共の監修に供し、われわれの船舶が実査したところは緯度および経度が修整される。会長および委員会は、協会に有益と考えられるような航海記、旅行記、航海術に関する書籍を購入する権限をもつ。

第3は、自然および人文的に希少性の高いもの、とくに喜望峰とホーン岬以遠で発見されたものの博物館を設立することである。この目的は思慮深い広がりのもとに達成されてきた。おもに会員の寄贈のみならず、協会に友好的な方々の活動も同様に貴重である。そして、すべてのコレクションは、協会が会議のために使用するホールに展示する。これらは進取でより科学的な精神のもとに整備される。また、そのカタログは協会と公共に向け絶大な貢献をされたセス・バス博士のもとで作成される。博物館を訪れる入場者（会員が同行する者）は、いつでも無料となる。

このようにセーラム東インド海運協会の設立の目的は、第1に会員間の「相互扶助」、第2は「航海情報の共有」、そして第3は「博物館の設立」である。

世界の海を股にかけての交易は、この時代、命がけであった。第1は互助による家族への補償をすること、第2は安全な航海のためには欠くべからざる対策で、みずからが経験したことを次に航海する者へ記録して伝え、事故や遭難を避けるべく備えておくということである。

注目すべきは、第3の博物館の設立である。現代でも世の中にはさまざまな博物館があり、その設置主体もいろいろ異なる。ピーボディ・エセックス博物館は海運都市、造船都市として興隆してきたセーラムならではの、きわめてユニークで特長ある歴史を有している点に留意しておきたい。

「若く活動的な会員が付け加えた最新の資料は、われわれの海洋知識を増大させ、また人間科学を喚



クラウンシールド埠頭図

ピーボディ・エセックス博物館所蔵 PEM Collection, M3459

起する。多数の資料を収集することがさらに望まれる」——このカタログの最後は、このようにむすばれている。それは、200年の長きにわたる時間を超えて脈々と受け継がれ、現在のピーボディ・エセックス博物館の理念や使命に継承されているのである。

3 モースという人

1854年にポートランド博物学会に入会したモースは、そのころからポートランドやボストンの博物学者やコレクターの知己を得るようになり、彼らのなかには自慢のコレクションを見るため、しばしばモースの自宅を訪れる者もあらわれた。とくにカタツムリなどの陸貝に希少性があったという。

そのような評判は、ハーバード大学教授のルイ・アガシー（1807-73）の知るところとなり、^{ものおじ}物怖しない性格のモースでも会うやいなやたちまち尊崇と敬愛の念を抱いた。この大学者との邂逅は、その後のモースの生涯を決定的なものにした。いわばモースにとっては運命の出会いであった。

そのころ、アガシーはハーバード大学付属「比較動物学博物館」の開設準備に奔走しており、多忙をきわめていた。標本収集や整理に長けたモースの能力をすぐさま見抜き、助手として採用するに及んだ。大学の講義を聴講することも許された。

スイス生まれの地質学者、比較解剖学者として、すでに『氷河の研究』や『魚化石の研究』など豊富な実績があったアガシーは、ヌーシャルテル大学の博物学教授から1846年、ヨーロッパでの名声の絶頂期の39歳のときに渡米し、ハーバード大学教授に就任した。

アメリカの博物学者たちは「この地質学ほか百学通暁のフランス・スイス人の大物」の到着を待ちわびていた。「それぞれの目撃印象談を興奮して報告し合っている」、また「アガシー渡米の日付をもってアメリカ科学界は成人式を迎えたのであり、世界の科学者たちの中に届く声をもつことになったのである」と称賛した⁵。アガシーはいわば「鳴り物入り」でハーバード大学にやってきたということになる。

アガシーに見いだされたモースは、ポートランドの実家からボストンへ引っ越し、大学構内の学生会館に移り住むこととなった。博物館ではおもに各地から送られてきた動物や生物の標本の荷解きをし、その整理をすることに明け暮れ、開設準備の仕事に心血を注いだ。ただし、アガシーからの給与の遅配が不満といえは不満であった。

新天地で大学というアカデミズムの香りにひたっていた若き日のモースは、当時のヨーロッパに旋風を巻き起こしたダーウィンの『種の起源』について興味をもつようになった。そのころボストンの博物学会では「進化論」をめぐる激しい論争が繰り返されていた。進化論を否定する立場にいた恩師アガシーは、反進化論の格好の材料として、4億年前と現在のものとの間にほとんど変化した形跡のない「シャミセンガイ」の研究をモースに命じた。その後、ハーバード大学を経て、セーラムのピーボディ科学アカデミーの開設に加わるようになって、モースは心酔するアガシーの命に従い、ずっとシャミセンガイの研究にいそんでいたのだが、やがて進化論の正当性を認めるにいたる。

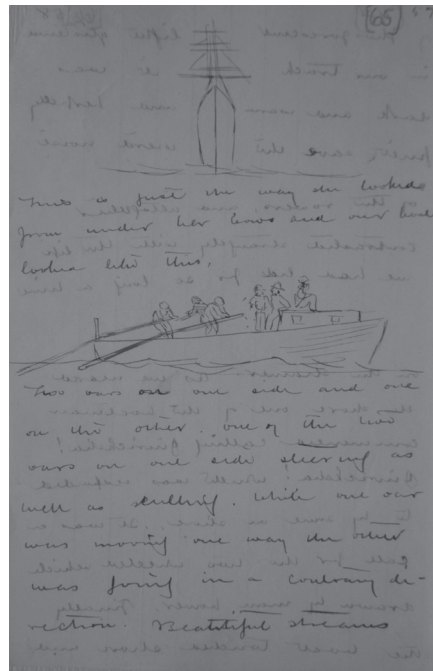
アメリカ沿岸ではわずかししか発見できないことから、シャミセンガイなど腕足類の種類と量が豊富な日本にいつかは必ず行ってみたいと熱望し、日本に対しては憧憬の念を抱くようになった。

後年、第2回の日本滞在時の1879年（明治12）、モースは「動物変遷論」と題する講演を東京大学講堂で催し、進化論を初めて日本に紹介した。会場には気鋭の少壮学者が多く参集。連続9回に及ぶその講義録は『動物進化論 全』「米国博士エドワード・エス・モールス口述、理学博士石川千代松筆記」として、1883年（明治16）に発行された⁶。

1870年、モースはピーボディ科学アカデミーを辞したのち、腕足類以外にも軟体動物の保護色、鳥類の骨の比較解剖学などについて次々と論文を発表した⁷。そして、1871年～74年にはボードイン大学教授に就任した。多くの講演旅行をこなしていたモースの足跡は、1874年には大陸を横断して遠くカリフォルニアにまで及んだ。

ボストン・グローブ紙の記者でモースのすぐれた伝記『エドワード・シルベスター・モース』を著したドロシー・ウェイマンは次のように記している——「サンフランシスコで、彼は初めて日本に豊富な種類の腕足類がいることを聞いた。そのニュースは彼の人生で、二番目に有名な主題を奏でる角笛の、柔らかな響きであった。次の科学探検は、腕足類を採集するために、日本に旅行しようと彼は決心した」⁸。このときから3年後、モースは日本への旅を実現させた。その当時はモース自身の家計や研究費が窮迫している状況であったのだが、「それでも日本の素晴らしい、生気にあふれた、あこがれの腕足類はモースの心の眼に煌めいていた。“一日一食に落ちぶれ”でも、彼は日本の腕足類を探しに行くつもりだった」⁹。

1877年（明治10）5月18日、妻子との別れに後ろ髪を引かれつつ、セラムの自宅を出発。5月29日、サンフランシスコを蒸気船シティ・オブ・トーキョー号で出航。17日間の船旅を終えて、6月17日夜半に横浜に到着した。本船から舳で接岸し上陸するときの様子を日記に次のように記している。「小舟はやっとならんと岸についた。私は叫び度い位うれしくなって——まったく私は小声で叫んだが——日本の海岸に飛び上った」¹⁰。文部省学監の任にあったデビッド・マレーへの紹介状のみを携えての上陸であった。



横浜への上陸
ピーボディ・エセックス博物館所蔵
PEM Collection

4 大森貝塚の発見と江ノ島臨海実験所

横浜港に着岸したその翌日、新橋まで開通したばかりの陸蒸気（蒸気機関車）^{おかじょうき}に乗って大森付近を走行中、モースは車窓から貝塚を見た。日本考古学史上、つとに名高い大森貝塚の発見である。線路のきりとおし切通に貝殻の堆積を認めたモースは、アメリカでの発掘調査の経験からただちにそれが貝塚であることを見抜いた。

「私は数ヶ月間誰かが私より先にそこへ行きはしないかということ、絶えず恐れながら、この貝塚を訪れる機会を待っていた」¹¹と、一刻も早く大森を調査したかった心情を吐露している。それから3カ月後、助手の松村任三^{じんぞう}をはじめ、特別学生の松浦佐用彦と佐々木忠次郎の計3名を同行させ、初めて大森貝塚に足を踏み入れた。このときモースらは、道具は用いず手で掘って、多数の土器、骨片3個、土板1個を採集した。その数日後から本格的な発掘調査が開始された。これらの成果は、イギリスの科学雑誌「ネイチャー」や「東京日日新聞」など、内外のメディアに報じられ、モースは一躍、脚光をあびた。



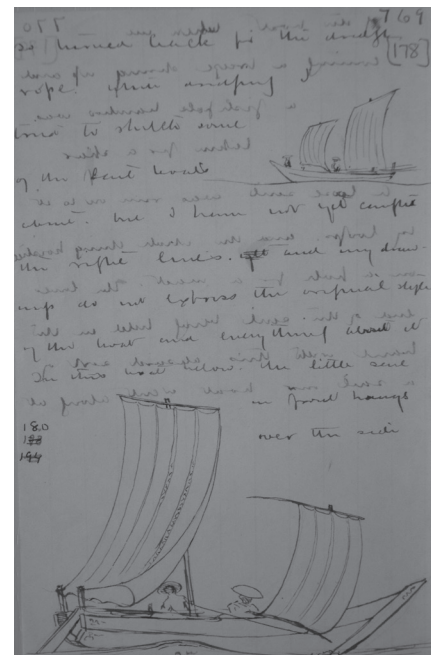
大森貝塚の発掘
当館蔵

同年10月9日、第3回目の発掘調査を大規模に実施。以降、発掘品はのちに東京大学の考古学展示室に収蔵されることになった。モースは日本アジア協会の例会での「日本に於ける古代民族の形成」と題する講演や、さきに挙げた東京大学での進化論に関する連続講演のなかでも大森貝塚に言及した。

そんなモースに対し、日本の当局者たちは東京大学動物学教室の設置、また博物館の創設のため、モースの力を是が非でも仰ぎたいと考えた。つまり、いかにモースを国内に長く引き止められるかに腐心したのである。結果、給与面など、かなりの優遇条件が示され、東京大学初代動物学教授に就任するはこびとなった。この背景には、モースの大森貝塚の発見と発掘が功を奏していた。日本人はモースの才能をこの件で高く評価したのである。

来日して1カ月後の7月17日、モースは江ノ島へ向かった。植物学教授の矢田部良吉の取り計らいで、実験所として小屋を借りることができた。ここを拠点に周辺で魚介を採集した。漁船で網を引いている間、突然、驟雨^{しゅうう}が襲ってきてずぶ濡れになったり、これから大島へ行こうと漁師に依頼したが、顔色を変えて固辞されたり、また漁師の切なる要望に応え、出現した鮫を獲るべく追い回したものの、結局、逃がしてしまったりした。しかし、「入江に帰った時、サミセンガイを求めて曳網を入れ、150個を獲た。又、珍しいものも入っていた。終日それ等を研究して来たところである。いろいろな新しい事実が判明して来ることは、驚く程である」¹²と、ほかならぬ研究上の釣果^{ちようか}に満足した。

「モースは、教会の規律の代わりに応用科学の実験的方法を、また、王侯の宮殿におさめられた個人的なコレクションの代わりに公衆のための博物館の設立という、二つの意味で独自のものを打ち立てた開拓者であった」¹³——ドロシー・ウェイマンは

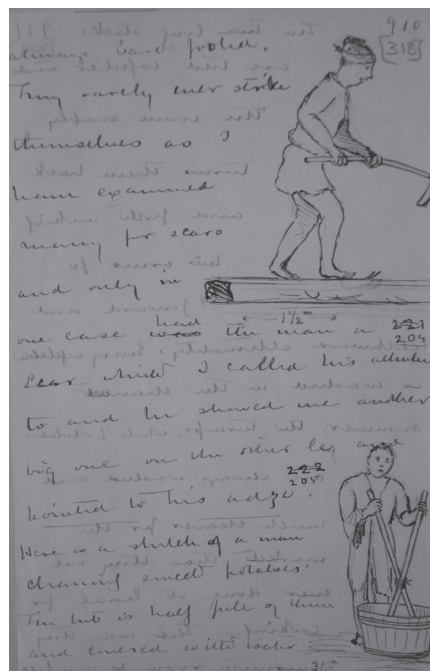


採集用の船

ピーボディ・エセックス博物館所蔵
PEM Collection

このようにモースの仕事への取組を的確にとらえた。生涯をかけて博物学の探求および博物館の設立に尽力し、そのため独自の体系に基づいたコレクションを形成した。

明治維新後まもない1877年（明治10）に初めて来日したモースは、3度にわたる滞日中、各地に足跡を残した。そのかたわら、庶民の日常にかかわるさまざまな「もの」を旺盛に収集した。人びとの暮らしに根ざした身の回りの品々とは、現存するモースコレクションから思いつくままに挙げると、たとえば職人の手の脂がたっぷりと滲みついた鉋・鑿、鋸などの大工道具、櫛・筭・簪、お歯黒道具といった装い、人びとの心象風景を表す巡り地蔵、はては鯉節やイナゴの佃煮、干菓子、海苔のような食べ物にいたるまで徹底的に集めた。生活の変化とともに現在の日本ではすでに失われてしまったものも多々ふくまれる。江戸の面影を色濃く残す明治初期の日本および日本人の暮らしの諸相を示す膨大な量の「もの」で構成されているのがモースの形成したコレクションである。モース自身が収集したものは、合計2千880点にのぼることが近年の私たちの調査で判明した。



手斧ではつる作業の大工（上）
ピーボディ・エセックス博物館所蔵
PEM Collection

【表】モース自身の収集品（モースが収集者もしくは寄贈者である博物館資料）

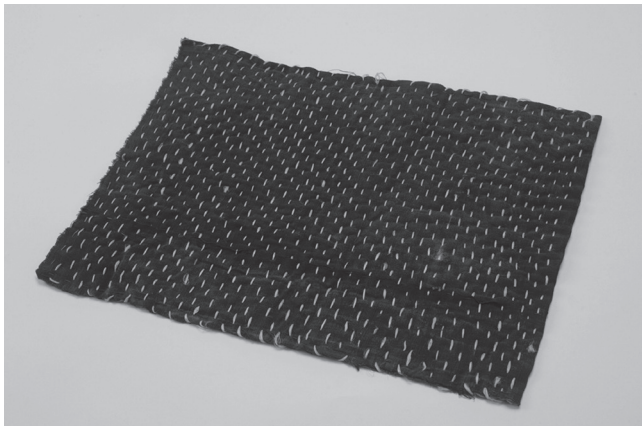
絵画資料 (2D Art)	200点
アイヌ資料 Ainu	30点
考古学資料 Archeology	390点
建築資料 Architecture	7点
陶器 Ceramics	1,050点
日常生活用具 Household and General	390点
根付 Netsuke	30点
服飾関係 Personal Accessory	200点
宗教関係 Religion	110点
看板 Shop sign	2点
型紙 Stencils	10点
布地 Textiles	20点
仕事道具 Tools and Profession	290点
玩具 Toys, games, etc.	110点
武具 Weapons	40点
計	約2,880点



イナゴの佃煮（瓶入り）
ピーボディ・エセックス博物館所蔵
PEM Collection, E00108



海苔（缶入り）
ピーボディ・エセックス博物館所蔵
PEM Collection, E38569



雑巾
ピーボディ・エセックス博物館所蔵
PEM Collection, E00002

巡り地藏
ピーボディ・エセックス博物館所蔵
PEM Collection, E16013



5 東京のモース

モースは、1877年9月から現在の東京大学本郷キャンパス内にあたる旧加賀屋敷を住まいとした。2回目の来日では、家族とともにこの官舎に入居した。「私は^{しばしば}屢々ヤシキの門から出て、大通りをぶらぶらしたり、横丁へ入ったりして、いろいろな面白い光景を楽しむ」¹⁴と記したとおり、気の向くまま本郷の周辺を、またときには下町を散策して人びとの暮らしを興味深く眺めた。当時の東京大学はまだ神田錦町にあり、人力車で大学に通っていた。

そんなモースにまつわるエピソードは枚挙にいとまがない。もっとも身近に接した日本人の一人である動物学者・石川千代松（1860-1935）の証言を紹介する。「（モース）先生は日本に居られた頃にも土曜の午後や日曜^{など}杯には方々の子供^{たくさん}を沢山集め、御自分が^{がき}餓鬼大将になって能く^よ戦争ごっこをして遊ばれたものだ」¹⁵。子どもが大好きで天真爛漫なモースの人柄がよく表れている話といえる。明治新政府のお雇い外国人であり、東京大学教授でもある「権威」と、「餓鬼大将の地位」とが何ら矛盾なく併存するのがモースという人なのである。また、神田の小学校において無償で講演を行った際は、校長が何かお礼をしたいと申し出たところ、モースはそれを辞退し、「今日講演を聴いて呉れた子供達が路で会った時に挨拶をして呉れば^そ夫れが自分には何よりの礼である」と述べた。

ドロシー・ウェイマンは、「モースは、決して石膏で造り祭られるような、えせ聖人ではなかった。しかし、人間としては性格上の欠点があったために、それが研究上の障碍となったり、折角の好意を寄せてくれた人の感情を害したり、敵に噂話の材料を提供したこともあったのである」¹⁶と述べている。とはいっても、日本とアメリカとを問わず、モースに少しでも接した人びとは、たちまち彼の人間としての魅力のとりこになってしまった。

日本に滞在していた約4年間、モースは日々のさまざまな出来事を克明に記していた。3千500ページにもおよぶ膨大な量の日記で、どのような方法で世に出すか、長年、考えあぐねていた。そのようなおり、3回目の来日に同行した畏友ウィリアム・スタージェス・ビゲローが差し出した手紙が、モースに出版の決意を固めさせた。

その文面は次のとおりである——「君（モース）と僕（ビゲロー）とが40年前親しく知っていた日本の有機体は、消滅しつつあるタイプで、その多くは既に完全に地球の表面から姿を消し、そして我々の年齢の人間こそは、文字通り、かかる有機体の生存を目撃した最後の人であることを、忘れないで呉れ。この後十数年間に我々がかつて知った日本人はみんなベレムナイツ（今は化石としてのみ残っている頭足類の一種）のように、いなくなって^{しま}了うぞ」¹⁷。換言すれば、ビゲローはモースが日本で経験した大



モースの住まい 加賀屋敷第5番
ピーボディ・エセックス博物館所蔵
PEM Collection

切な記録を書物として残しておかないと、あのときの日本が誰も分からなくなってしまう、と警告したのである。

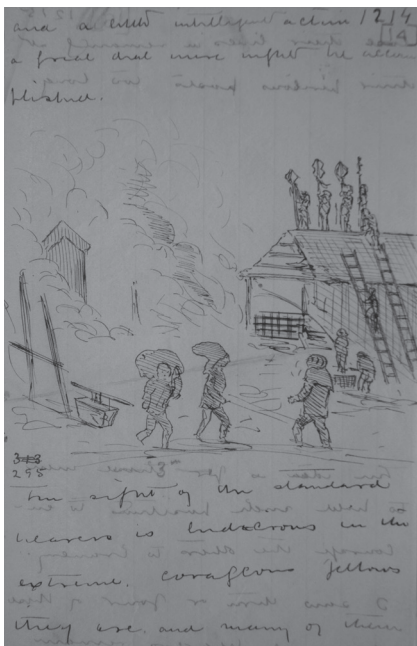
そして、この日記は1917年（大正6）、モースが79歳のとき、最後の来日から数えて実に24年を経たのちに、モース自筆の777点のスケッチを含め、『日本その日その日』（“Japan Day by Day”）の書名で上梓された。今日、この日本滞在の記録は、江戸から明治へと時代が大きく移り変わるなか、当時の庶民の暮らしを示す貴重なエスノグラフィ（民族誌）として高く位置づけられる。

1886年（明治19）の「日本のすまい」（“Japanese Homes and Their Surroundings”）¹⁸、および1901年（明治34）の「モース日本陶器コレクション目録」（“Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery”）とを合わせた「日本関係三部作」の著作と、みずから収集した約2千800点余の実物標本資料により、モースは明治の日本と日本人をとらえたのであった。

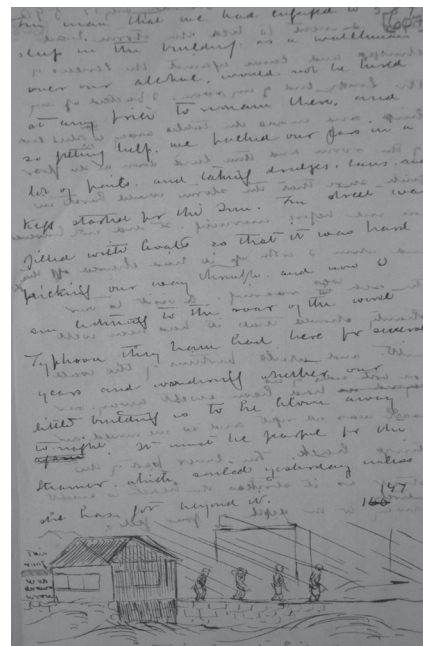
6 地震と火事と台風と

モースは来日して1週間後に初めて地震を経験した。それは芝居見物の最中のことであった——「（私のテーブルはたった今地震で揺れた。1877年6月25日、——また振動があった。またあった）隠れているかのように蹲^{うずくま}り、そして明瞭に聞える程の大声で助言する」。助言したとあるが、周囲の人たちに英語で大声を発したのだろうか。しかし、恐ろしかったなどの記述は見られない。

一方、家が5、60軒も焼かれた大きな火事にも遭遇した。消防夫たちの動きがたわいないので、「私は辛抱しきれず、大きな棒を一本つかんで、上衣を破り、釘で手を引掻^{ひっか}きながらも飛び込んで行った」「かかる火事に際して見受ける勇気と、無駄に費やす努力との量は、驚く程である」と、消防夫を称賛しつ



市中の大火事
ピーボディ・エセックス博物館所蔵
PEM Collection



嵐に遭う江ノ島臨海実験所
ピーボディ・エセックス博物館所蔵
PEM Collection

つも、消火方法そのものの工夫をもっと凝らすべきだ、と述べている。

江戸島臨海実験所の建物ができあがり、そこに資機材を運び入れるさなかには台風に見舞われた。「我々の建物から見た光景は物凄かった。大きな波が、今や全く水に覆われた、砂の細長い洲の上に踊りかかっている。その怒号とその光景！」とモースは記し、実験所の建物が吹き飛ばされないか、波にさらわれないか、石垣が壊されないか心配になり、貴重な実験材料や道具とともに宿屋へ避難した。「夜中の間に嵐が直接に私を襲いはしまいか」と思われるほど不安をかかえていたが、台風一過、翌朝、実験所へ行ってみたら、「この建物が、こんなに激しく叩きつけられても平気である程、しっかり建てられていることが判った」¹⁹と安堵したのである。

7 モースコレクションの逸品：キュレーターズ・チョイス

鎧よろい冑かぶとに身をかため、やや伏せ目がちにも威風堂々と腰をおろす武士。月代さかやきや鬢びんは小ざっぱりとしているが、頬から口元にかけての髭ひげの剃り跡がうっすら青い。髪の毛は人毛、眼はガラス製で瞳は内側から着色してある。生気がみなぎるかのような薄紅色の唇。実在の歌舞伎役者をモデルにしたのではないかとさえ思わせるような端正な顔立ち。衣類から露出する顔と襟首など皮膚には胡粉が塗られ、透明感のある人肌が艶やかだ。2013年の特別展「明治のこころ」で初公開されたこの甲冑武士の等身大の「生き人形」は、コレクションのうちでも特異といえる。モース自身が人形師に発注のうえ制作したものである²⁰。安政年間（1854-1860）に大坂で大流行し、幕末から明治にかけて見世物興行などに使われ、盛り場で人気を博したという生き人形は、「活いきるが如く造りたる」人形という意味からこのように呼ばれた。江戸では浅草の奥山や両国の回向院で興行された演目が、刷り物などにおどろおどろしく描かれている。江戸の巷間異聞を編年体で記した斎藤月峯げっしん著『武江年表』²¹の1856年（安政3）の項には、生き人形が登場した見世物小屋の盛況ぶりが次のように記されている。

二月より、浅草寺奥山いきにんぎょうに活偶人みせもの再び始む（肥後熊本松本喜三郎が作なり。水滸伝の豪傑、忠臣蔵夜討、鏡山浄り狂言の遇人、一ツ家の姥、為朝に島人、遊女屋ないしょ内証ていの体、久米の仙人布洗女など活くるが如く造りたり。この仮屋間口十三間奥行十四間にて、遇人の数六十二あり。看せものを開けるうちの壯観なり）。

間口が約23メートル、奥行約25メートルの小屋掛けで、62体もの生き人形を駆使し、江戸っ子に馴染みのある説話や歴史に題材をとったストーリーを設定のうえ、興行を打った熊本の松本喜三郎とはいったいどのような人物か。生き人形は現在の日本にはほとんど残存していない。しかし、松本の作品は出身地・熊本の浄国寺に「谷汲観音」が現存している。また、ワシントンのスミソニアン自然史博物館に保存されている松本作の男性の生き人形は、着物の下に隠れる胴体も精巧に造られ、性器にいたっても大変リアルである。足の裏には「松本喜三郎」の銘がある。松本の生き人形の興行の際は、「日本生人形元祖松本喜三郎」という幟が小屋に立てられるほどで、この世界の第一人者であったことがうかがえる。

この松本喜三郎という生き人形師について、高村光雲は国華倶楽部の例会において「名匠逸話一人形師松本喜三郎の話」と題した懐古談のなかで取り上げている²²。それによると、「伝法院のお抱で浅草寺の出入、観音の奥山は新門の辰五郎が悉皆支配をして居った」ことから、松本は新門の辰五郎あてに「(浅草) 奥山の檜舞台で観せて貰ひたい」と願い、熊本から「肥後の熊本清正公様」を見世物にした生き人形を送った。これが契機となって、松本の生き人形は一世を風靡し、たちまち江戸市中の見世物好きの話題をさらうことになった。

ここで、生き人形が当時の見世物興行でどのような演出のもとに使われていたのかにふれておきたい。モースコレクションには約千点の着彩幻灯写真が含まれるが、そのなかにも実際の見世物小屋に生き人形をしつらえた様子がわかるワンカットを見つけることができた。これは毛利元就の「三矢の教え」の教訓を論ずるシーンと考えられる。中央の元就らしき人物を中心に、3人の兄弟とおぼしき子どもたちが集う。その前には折れた矢が置かれている。1本の矢は簡単に折れてしまうが、3本まとめると容易には折れない。兄弟3人が結束して毛利家を守ってほしい、と父が子どもたちに告げた逸話に基づく趣向で



生き人形 甲冑姿の武士
ピーボディ・エセックス博物館所蔵
PEM Collection, E16312



生き人形 三矢の教え
ピーボディ・エセックス博物館所蔵
PEM Collection



生き人形師の工房
ピーボディ・エセックス博物館所蔵
PEM Collection

ある。4体の生き人形は畳の上に配されるが、後ろの襖や天井は空間の奥行が出るように書割で描かれている。生き人形という当時の見世物の仕組みがわかるきわめて珍しい写真といえよう。

8 モースが愛した見世物

東京に滞在していたモースの見世物好きも、江戸庶民のそれと人後に落ちぬほどで、よく浅草界隈に通じていた。ある日、友人と一緒に奥山を訪れ、楊弓や鳩、山嵐、猿の見世物に興じた。猿とは握手もし、その手の感触を子どもの掌のようにあたたかくて少し湿っていたとの感想をもらしている。蠟人形(生き人形)も見に行きその情景について、「この人形で見たような、勢いと熱情を、米国では絵でも彫刻でも見たことがない」と述べ、次のように記している。

ある一場面ではお姫様が七尾の狐に変化したが、この演技に関する話を物語る老人を見詰めることも、舞台上の口をきかぬ人形を見るのと同様な研究であり、おまけにオーケストラの立てる、途方もない音や、拍子をやたらに変える所は、私がそれ迄^{まで}迄耳にした如何なるものとも丸で違っていた²³。

モースが見た生き人形のストーリーは「狐の嫁入り」であろうか。ここで注目すべき点は、老人が話を語り、「オーケストラ」、つまり楽曲付きであったことだ。静寂な雰囲気の中であじくると生き人形を見るのではなく、かなり賑やか、いや喧^{かまびす}しい場での見物であったことがうかがえる。モースの描写はさらに続く。

お姫様は玉座みたいなものに坐り、その周囲には等身大の人形がいくつか、今にも恐ろしいことが起るぞというような表情で集っていた。突然玉座が真中から割れ、お姫様がバラバラになって姿を消すよとみる間に、尻尾が七つある巨大な狐となって現われ、とても物凄^{こわ}い有様で牙を喰いしばりながら舞台をうろつく。この狐は実によく狐に似ていた。私は日本の俗説を知らないので、いろいろな人形がどんな意味を持っているのか、とんと判らなかつたが、それ等の持つ力と表情とによって、日本の芸術家が絵画に於る如く、彫刻にかけても偉いということを知った²⁴。

9 生き人形をセーラムへ

松本喜三郎の活躍していた安政のころに比べ、モースが見た明治の初めの生き人形の興行には、だんだんと大掛かりで凝った仕掛けが加えられていたことがわかる。生き人形が発する力と表情に強い印象をもったモースは、みずからも生き人形を収集した。甲冑武士を含めると全部で8体あり、いずれもピーボディ・エセックス博物館が収蔵する。その内訳は、武士・奥方・男児・女児・乳児、それに農夫・農

婦である。モースは武家と農民の家族というユニットに注目して収集したと考えられる。

しかし、甲冑武士は家族ではなく単体である。これはビゲローの尽力と刀剣商の町田平吉の寄贈によって、ピーボディ科学アカデミーが多数の武具コレクションに恵まれることとなったため、モースは臨場感あふれる展示効果を考慮し、甲冑武士の生き人形をそれに活用しようとしたのではないだろうか。

では、モースはいかにして計8体の生き人形を収集したのか。モース文書に東京大学動物学教授であったみつくりかきち箕作佳吉を差出人とするモースあて、1882年(明治15)12月6日付の書簡が残っている。要約すると、「箕作は人形師との間でモースが購入するための交渉を行った。人形師の方はあらゆる職業と階層が含まれる71体のセットで購入することを薦めた。この中からモースは好きな人形を選ぶこともできる」といった内容である。

その後、同じく1883年(明治16)1月29日付の手紙には、「箕作が人形師に支払いをすべて済ませ、モースに領収書を送った。女性の人形の衣類をもっとよいものに換えた。安全な保管と輸送をモースに進言した」などと記されている。モースの生き人形の収集にあたっては、このように箕作佳吉が関与していたのである。

そして収集の時期はモースが最後の日本滞在を終えようとするころであった。事実、モースはその年の2月14日には、ビゲロー、フェノロサ、そして箕作らに歓送の宴をもたれつつ、横浜を出港し帰国の途についた。ヨーロッパを経てアメリカに到着したのは、同年6月5日。7月1日には、これらの生き人形はセーラムのピーボディー科学アカデミーに引き渡された。

繰り返すが、モースは当時の日本では何の変哲もない庶民の日常生活を主体とした多彩な品々を数多く収集した。モースコレクションの真骨頂である。しかしながら、なぜ8体もの生き人形を収集したのか。甲冑武士の生き人形を収集したのは、武具コレクションが豊富となり、その展示を充実させるためではなかったか、と先に述べた。それでは、ほかの7体、つまり2つの家族について、大人や子ども、男と女、武家と農民などと、タイプをとりそろえた訳とは。そこには、アメリカ最古の博物館の揺籃期を担った博物学者であり、かつ民族学者モースの選択眼、躍如たるものがある。これこそ、モースの日本理解の手段。「日本人のモデル」を生き人形に求めたのではないか。彼は生き人形そのものではなく、「日本人の標本」を収集したかったのではないだろうか²⁵。

現在のわが国ではすでに失われてしまった生き人形。モースはその芸術性に言及したものの、そもそも見世物興行に用いられ、江戸から明治にかけての市井の人びとに圧倒的な支持を得ていた生き人形。芸術であろうが、見世物であろうが、いずれにせよ、かくもリアリズムの極致に徹した、この特異なエンターテイメントに驚嘆するのはモースだけではあるまい。これらの生き人形を目の前にすると、明治という時代を生き抜いた私たちの先祖が、140年の時空を超えて、突如、いまここに出現したかのように感じてくるのである。

[追記]

調査報告書という趣旨から、本稿は新たに書きおろしたもの、すでに発表したもので構成した。

【註】

- 1 金井圓『日蘭交渉史の研究』思文閣出版、1986年
- 2 Peter Fetchko, "The American Neptune, Volume 55, Number 4"
- 3 江戸東京博物館、ピーボディ・エセックス博物館編『日米交流のあけぼの』1999年
- 4 "Catalogue of the East India Marine Society", first printed edition 1821.
- 5 リン・バーバー『博物学の黄金時代』高山宏訳、国書刊行会、1995年
- 6 エドワード・エス・モース口述『動物進化論 全』石川千代松筆記、萬巻書楼、明治16年
明治文化研究会編「明治文化全集 第27巻 科学篇」日本評論社、昭和42年
- 7 磯野直秀「日本におけるモースの足跡」守屋毅編『共同研究モースと日本』小学館、1988年
- 8 ドロシー・ウェイマン前掲書
- 9 ドロシー・ウェイマン前掲書
- 10 E.S.モース『日本その日その日』石川欣一訳、平凡社東洋文庫、1970年
- 11 モース前掲書
- 12 モース前掲書
- 13 ドロシー・ウェイマン前掲書
- 14 モース前掲書
- 15 石川千代松「序」E.S.モース『日本その日その日』石川欣一訳、平凡社東洋文庫、1970年
- 16 ドロシー・ウェイマン前掲書
- 17 モース前掲書
- 18 邦訳に『日本のすまい・内と外』上田篤・加藤晃規・柳美代子訳、鹿島出版会、1979年。および『日本人のすまい』
斎藤正二・藤本周一訳、八坂書房、1991年。
- 19 モース前掲書
- 20 小林淳一『明治のころ—モースが見た庶民の暮らし—』青幻舎、2013年
- 21 斎藤月岑『増訂武江年表』平凡社東洋文庫、1988年
- 22 高村光雲『光雲懐古談』萬里閣書房、1929年
- 23 モース前掲書
- 24 モース前掲書
- 25 小林淳一『海を渡った生き人形—ペリー以前以後の日米交流—』朝日選書、1999年